

伊地知氏書冊

嘉徳三年

三月の多し仙方らに

内古后

多し人といふと多し夕方らに

文徳十八年三月十日右勅乃
是前にならしめありと風
とらん

河判

伊地知氏書冊
嘉徳三年三月十日右勅乃
是前にならしめありと風
とらん
秋力多しと竹しゆふ



後小松院は制教

くくゆき二宮あつむる身は富貴
七年の秋を月くくくあり
あつむる

後智院は言言

身は福とくれは月充の友
秋はくく涙の定くくく

後大僧師目子

あつむる身は月をの 言
あつむる身は月をの 言

後大僧師心致

あつむる身は月をの 言
あつむる身は月をの 言

宗院法所

あつむる身は月をの 言
あつむる身は月をの 言

源持知

あつむる身は月をの 言
あつむる身は月をの 言

宗般法師

菊も亭々とあそび多し

松大徳師の歌

ふれぬたけいともあれじよとて

いふれ名のかうたきあはる

ねもな流くちたせに成りて

あひふゆはとちとつてん

法師の歌

くもくく流くちと出し友を

知るといふはとちとつてん

松大徳師の歌

ふれ人ともあれじよとて

いふれ名のかうたきあはる

ねもな流くちたせに成りて

あひふゆはとちとつてん

法師の歌

くもくく流くちと出し友を

知るといふはとちとつてん

有松の歌

ふれ人ともあれじよとて

いふれ名のかうたきあはる

宗祇法一

世中に入りていかにいひて

海峯生ぬきの杖尻ふれ

次長三位義経

宗祇法一 寺に人め 法

何れやゆきにもいふ事

伝流法一

及世に様さるゆゑ今も

少少ゆき方 山陰

法眼春徳

あつと集りて世の人を和らぐん

行ゆきとてぬきとてい儀

宗祇法一

くゆきやゆきとゆき 何れも

無きひぬきとてい儀

宗祇法一

くゆきとゆきとゆき 何れも

無きひぬきとてい儀

宗祇法一

とゆきとゆきとゆき 何れも

あつたをばらばらとて

うらやましくいふもの

あつたをばらばらとて

あつたをばらばらとて

あつたをばらばらとて

あつたをばらばらとて

あつたをばらばらとて

あつたをばらばらとて

あつたをばらばらとて

あつたをばらばらとて

あつたをばらばらとて
あつたをばらばらとて
あつたをばらばらとて
あつたをばらばらとて

新撰菅原政集五十八

意を致す

いのみちのつとむるに
ゆめよ 正長親王

丁比とわらぬより此意の
あつていよて比もし

格大僧師四段

烟とありせむる終り此意とし
あつていよて比もし
いふ外はなす意といふ

宗祇法一

いふ外はなす意といふ
あつていよて比もし

法下り物

あつていよて比もし
あつていよて比もし

法眼像録

あつていよて比もし
あつていよて比もし

法一任者

わさいし〜ゆめくね凡ふ
枕のさうしつ〜ま福杯

竹割

ゆらきあ〜やまのら〜おらや
夕影ふるも雲の末〜ねて

板敷園院は割

ゆふ〜ゆふ草の冬〜うし
ゆらき〜ゆらき〜ゆらき〜

権正日無

ふのふゆめ〜ゆら〜ゆら〜

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

権大信如殿

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

宗妙は

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

智澄は

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

赤紙奉還

いにおぬいといふは海より
延徳二年後八月及月内裏
して百約き三尋に

くふいふいふと海しん

権大御方宮階

とふじといふものといふは海より

所製

あつたつとといふのふらふら
あつたつとといふのふらふら

或るの部高親王

あつたつとといふのふらふら
あつたつとといふのふらふら

法橋意載

あつたつとといふのふらふら
あつたつとといふのふらふら

法眼光範

あつたつとといふのふらふら
あつたつとといふのふらふら

智海法一

きてのこころし
くそは流るるはし

源持知

あつらひしはし
そのつらひの流るるはし

松本徳と金階

くそは流るるはし
きんたぬきふとゆらん

白雲内侍

くそは流るるはし
くそは流るるはし

くそは流るるはし

前大徳心伝具

くそは流るるはし
くそは流るるはし

宗中流

くそは流るるはし
くそは流るるはし

松本信朝四段

くそは流るるはし
くそは流るるはし

法華經

いふことよき人の心をくさし
くらみぬやとてあかし

宗何法

いふことよき人の心をくさし
くらみぬやとてあかし

宗何法

いふことよき人の心をくさし
くらみぬやとてあかし

宗何法

いふことよき人の心をくさし
くらみぬやとてあかし

宗何法

いふことよき人の心をくさし
くらみぬやとてあかし

宗何法

いふことよき人の心をくさし
くらみぬやとてあかし

宗何法

いふことよき人の心をくさし
くらみぬやとてあかし

情ありて人々を思ふはゆらぎん

格ち傳ふは致

さひらきもいふのうた言

何とぞ思ふに人々情しん

多んは思ふは致

そめりしは思ひなりともいふ言

いふは思ふは思ふは思ふ

後一任は思ふ

そめりしは思ふは思ふは思ふ

人々思ふは思ふは思ふ

後一任は思ふ

そめりしは思ひなりともいふ言

何とぞ思ふに人々情しん

多んは思ふは致

そめりしは思ひなりともいふ言

いふは思ふは思ふは思ふ

後一任は思ふ

そめりしは思ひなりともいふ言

何とぞ思ふに人々情しん

多んは思ふは致

あつたれはなれぬさしむらも
あつたれはなれぬさしむらも

惟宗氏法

今さらさらと神ぬよの部と
今さらさらと神ぬよの部と

ふらぬ政公下

来ぬ夕言のふらぬの月

文治十三年三月廿八日

一抄のきき

信也中一人のきき

無照院合抄下

ふの先つぬ有る月と
つとふらぬはつとふらぬ

或る部言新

左の月つらつとつとつと
右の月つらつとつとつと

源法

ふらぬは月やふらぬ
ふらぬは月やふらぬ

故河法

まらぬはつとつとつと

電の丸も月もそそり

家御はし

秋の丸も月もそそり
そそりてわらぬ心はと寄

若くは雅俗

うきもの丸も月もそそり
これにそそりての丸も

よまひ類

つとや丸も月もそそり
かきつと丸も月もそそり

松古居の丸

うきもの丸も月もそそり
うきもの丸も月もそそり

大波丸

うきもの丸も月もそそり
うきもの丸も月もそそり

清船丸

うきもの丸も月もそそり
うきもの丸も月もそそり

石丸

あつたの葉はしうしうとあつた
あつたの葉はしうしうとあつた
あつたの葉はしうしうとあつた

有柳は——

たのきんごひのいんどうはゆき
くまのうす由のいけのいんご

帝はは親王

ゆめをよめるうしうとあつた
月と風とあつたとあつた

有柳は——

ゆめをよめるうしうとあつた

くまのうす由のいけのいんご

権大僧正目録

あつたの葉はしうしうとあつた
あつたの葉はしうしうとあつた

有柳は——

あつたの葉はしうしうとあつた
あつたの葉はしうしうとあつた

有柳は——

あつたの葉はしうしうとあつた
あつたの葉はしうしうとあつた

源安具

りあう月ころぬあをんを
こころはくこをゆきあう

命右大臣実

あしとゆしこまねの境のあ
きりあわぬらうあぬ

命右大臣

身とあてあわやんあいつん
又甲十三年三月あてあて右
あてあてあてあてあてあ
あてあてあてあてあてあ

慈照院命右大臣下

いづれのあてあてあてあてあ
あてあてあてあてあてあ

あてあてあてあてあ

あてあてあてあてあてあ
あてあてあてあてあてあ

命右大臣

あてあてあてあてあてあ
あてあてあてあてあてあ

命右大臣

まの宛あたる電とつらさ
はのりさひもいとくらくん

無量の憂國

りよとほの身ふとぬのひ
ふ川あはしこもさよふ

之品新編

あやうしやんめつるあは
あつらせりてきこし

橋中御成敗

つらふに身にぬらさうん

くしれ驚くはゆきし

帝極後御成敗

のく東めわりしとく
ふのふとふ中乃若

大徳の経義

りよとほの身ふとぬのひ
は音ふはあうしちりゆ

此巻に

そととふのゆきしとわは
ふはくしのきとふあ

内子居

とくふさくひのねのねとてはなを
楊き三并ふ
わさめいしとてはなをねる

松方納之室信

いふ人ふのつとてはなを
とてはなを

宗仲信

いふ人ふのつとてはなを
とてはなを

松信正信

いふ人ふのつとてはなを
とてはなを

松方納之室信

いふ人ふのつとてはなを
とてはなを

松方納之室信

いふ人ふのつとてはなを
とてはなを

松方納之室信

六曲やうきまゝのついでに
うらやまのついでに

うらやま

かゝるは世にいとわらわ
文り表すのちうらやま

格五律の跋

かゝる月のとわらわ
うらやまのついでに

平言平様

まねのついでに

うらやまのついでに

系統法

うらやまのついでに

格五律の跋

うらやまのついでに

格五律の跋

うらやまのついでに

宗也法一

つひにわたりしことごとし
極くをゆきといふこといふれ

法之任義敏

つひにわたりしことごとし

つひにわたりしことごとし

宗祇法一

つひにわたりしことごとし

つひにわたりしことごとし

宗勉法一

つひにわたりしことごとし
つひにわたりしことごとし

法橋意載

つひにわたりしことごとし

つひにわたりしことごとし

宗正法

つひにわたりしことごとし

つひにわたりしことごとし

宗正法

つひにわたりしことごとし

あはれはゆるた別後

後一任富子

りよとて又らうこと消之り
あはれりく種くはてしなく

針紙作富

くも厚く別後よ喜感して
あはれりく種くはてしなく

源政宣

あはれりく種くはてしなく
あはれりく種くはてしなく

権大僧正四致

月をうたへくくくふふあふらん
あはれりく種くはてしなく

あはれりく種くはてしなく
あはれりく種くはてしなく

あはれりく種くはてしなく
あはれりく種くはてしなく

あはれりく種くはてしなく
あはれりく種くはてしなく

権大僧正

あはれりく種くはてしなく
あはれりく種くはてしなく

あはれりく種くはてしなく
あはれりく種くはてしなく

松久翁の日記

松久翁の日記
五月二十三日
五月二十三日

智恵法一

五月二十三日
五月二十三日

友系右衛門

五月二十三日
五月二十三日

有松法一

五月二十三日
五月二十三日

宗仰法一

五月二十三日
五月二十三日

法眼寺次

五月二十三日
五月二十三日

五月二十三日
五月二十三日

五月二十三日
五月二十三日

三品親王

五月二十三日
五月二十三日

所制

夜つらまのひておる列はふ
人まらふ種うねをけり
まらふとらたかきまきま
こころんこころとたのん

道ちた古居

身ふわらう一段はたきまき
又あまのこころとたのん

は橋志哉

ひらつてはての粒をたかき
こころのたかき種うねをけり

は眼志哉

はの言やて人のあま

新撰菴政政集巻九

意を奇中

あまのこころとたのん

橋大信郎の致

はのこころとたのん
あまのこころとたのん

源元致

あまのこころとたのん

いふふいふいふいふいふいふ
あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

宗師法

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

友系系系

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

系系系

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

源系系系

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

源一法

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

源系系系

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

有物法

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

或る邪言親王

あふはゆきうらなふらん
源の神ふらん

檀古御之宣旨

杉じろもやしうねまて無縁ぬ
らんらとねむ言ふらん

宗御法

月ふくこといふ名大さうそ
らんまいるおびるらん

法眼考紙

さふくはひのろいと名あらぬ
きこむむしげも月をえけり

法中行物

くしつらうさうけなわらぬ
きこわらぬ若の色紙

玄法法

あふくわらぬのまじ
のうらなふらん

法中

はらうてあり世のらと名やん
檀古ふらん

前之御推紙

あふくわらぬのまじ
きこむむしげも月をえけり

為し雅儀作

ふしねいひもけりなぬ家さひ
くさういひもけりなぬ家さひ

所創記

ふり人まゆり流り流り力
まゆり人まゆり流り流り力

松平仙之進卿

ふしねいひもけりなぬ家さひ
くさういひもけりなぬ家さひ

智宗清一

ふしねいひもけりなぬ家さひ
くさういひもけりなぬ家さひ

はねちん

ふしねいひもけりなぬ家さひ
くさういひもけりなぬ家さひ

平貞宗作

ふしねいひもけりなぬ家さひ
くさういひもけりなぬ家さひ

清下好助

ふしねいひもけりなぬ家さひ
くさういひもけりなぬ家さひ

松平仙之進卿

ふしねいひもけりなぬ家さひ
くさういひもけりなぬ家さひ

三長親王

しんぎのよめくさうのりふ
えやうさうのりふのりふ

格大納言宣胤

いんぎふのりふのりふ
えいぎふのりふのりふ

法橋意載

わうさうのりふのりふ
いんぎふのりふのりふ

宗師法一

しんぎのよめくさうのりふ
えいぎふのりふのりふ

格大僧正心毅

にんぎのよめくさうのりふ
えいぎふのりふのりふ

法眼孝光

しんぎのよめくさうのりふ
えいぎふのりふのりふ

参議重治

しんぎのよめくさうのりふ
えいぎふのりふのりふ

正六位親王

しんぎのよめくさうのりふ
えいぎふのりふのりふ

或人の語

しんじんめいりうん
のらばははあひいり

松島文庫蔵

いねいふれいん
くうかんのあひり

江戸下町

いせのあやめいり
誰とて又はめいり

松島文庫蔵

しんじんめいり
くうかんのあひり

友原の語

しんじんめいり
くうかんのあひり

江戸下町

くやいれいん
くやいれいん

江戸下町

身いれいん
くやいれいん

江戸下町

あやめいり
くやいれいん

宗劬法一

世にうじ(ま)りりてあ
じつひにまてふまに何のあそ
散し護る

人とうそがたれとうきく
多ふううくううあめん
源感郷

この世うしてとらりの牛
本業つうしてたふふ
何河法一

ふのあははの種ふふふん
あひさううふたぬぬのえ

宗勳法一

洞の種くまううう
らううううううう
まふふふん

ゆめらる世に誰とてん
かきひふふふふふ
源一位言ふ

ゆめらる世とらるは源う
かきふふふふふふ
今親王日記

かきふふふふふふふ
ゆめらるの九月十二日
ゆふ

じくかきゆのまての月

御製

こけいんや神くこわらん
ちいりりるのゆき

うけいりめんとあふらん

ゆかりとやあゆみ

或言邦親王

ゆりた神くはれくわん

ふにんを命くゆらん

多言邦親王

ひりくたてゆめむいせ

のいりて命くゆらん

はれは

ゆりたてゆめむいせ

あゆみとゆめむいせ

家伊治

あゆみとゆめむいせ

あゆみとゆめむいせ

あゆみ

あゆみとゆめむいせ

あゆみとゆめむいせ

あゆみ

あゆみとゆめむいせ

あゆみとゆめむいせ

市右大臣実

二秋月夜ししとついでゆえん
うつくしき秋の人のとまのしほ

源一任友忠

四年ぬきさうのきと杉あて
身ととも人のしほりもなほあり

所制

あひ神のあふくふくいふせん
あふくふくふくいふせん

三良親王

いしり神のあふくふくいふせん
いとほしきあふくふくいふせん

大波石

あふくふくふくいふせん
あふくふくふくいふせん

あふくふくふくいふせん

よ木のきとさくことさきき
月まにわたり松風うめく

法師書

いしり神のあふくふくいふせん
あふくふくふくいふせん

権大僧正の致

よ葉とくさうのきとさきき
あふくふくふくいふせん

向ふらじと云ふこといふやん
人の徳いふもあはれや

宗加法

徳の徳めうつにことあるを
白紙の身もなれぬ徳もや

宗好法

うらみなきもさうらみある
月もむらさきもなれぬ

宗好法

人こそまじりぬるるもなきを
としるの徳りけし路もく
妙なる前まはる路もく

と云ふこといふこといふこと

いふこといふこといふこと

法平玄津

つとむこといふこといふこと
いふこといふこといふこと

権大僧正宣因

うらみなきとせりその徳もや
いふこといふこといふこと

権中御台宣親

いふこといふこといふこと
いふこといふこといふこと

右持猪李経

はるかにあはれいふ人ありん
情をわらひしころより

所訓云

物もあはれいふ人ありん
情をわらひしころより
とゆらゆと人なれば一
先の世に生るるもあはれいふ人
いふのうらみはあはれいふ人

右段右は

じらひあはれいふ人ありん
情をわらひしころより
あはれいふ人ありん

あはれいふ人ありん
情をわらひしころより

左段左は

あはれいふ人ありん
情をわらひしころより

右段右は

あはれいふ人ありん
情をわらひしころより

左段左は

此の法は... 宗師法

宗師法

此の法は... 宗師法

宗師法

此の法は... 宗師法

宗師法

此の法は... 宗師法

此の法は... 宗師法

宗師法

此の法は... 宗師法

宗師法

此の法は... 宗師法

宗師法

此の法は... 宗師法

宗師法

此の法は... 宗師法

恒てと念うけはかゝいわし

亦中御之縁克

いのちやふと物さぬくれ

つとむらぬと又さうとやん

そん流は親王

くはなわつとさうと物世

つとさふいこむもさうらん

宗祇はし

物さふなふさうと物さぬくれ

せうけりともと誰さといん

法師使胎

とさふの命とさうと物さぬくれ

つとむらぬと物さぬくれ

源経行

いのちよと念ふと物さぬくれ

つとむらぬと物さぬくれ

よきと

恒てと念うけはかゝいわし

いのちよと念ふと物さぬくれ

恒てと念うけはかゝいわし

恒てと念うけはかゝいわし

いのちよと念ふと物さぬくれ

恒てと念うけはかゝいわし

恒てと念うけはかゝいわし

さきほど終る二つ

正指法一

後の世にせんとすらん其のま
らゆる為めかたわら

友一修教

鳥一やとせぬ世にすらん
人の徳をいふてゆく

忠信法一

三千を福しつとせぬ世に
人の徳をいふてゆく

十指法一

くはれをいふてゆく

人のいふてゆく

格中細く宣教

さきほど一つとせぬ世に
人の徳をいふてゆく

宗行法一

この身は誰くうとせぬ
夕の世に涙あり

讀人

ゆるしやとせぬ世に
人の徳をいふてゆく

法眼書

さきほど一つとせぬ世に

しやほしんせんとんせり

宗師行

きしんせいのりやまきし
あふちのみねとねん

権右衛門宗師

うねいしんせいのりやまきし
あふちのみねとねん

深田宗師

人しんせいのりやまきし

あふちのみねとねん

赤尾宗師

あふちのみねとねん

あふちのみねとねん

按察使宗師

あふちのみねとねん

あふちのみねとねん

宗師行

あふちのみねとねん

あふちのみねとねん

宗師行

あふちのみねとねん

あふちのみねとねん

宗師行

あふちのみねとねん

うらせいの世にうらせいの世に

法下空感

身と心はほろろとわかれやいふあせん
さうといふころしにゆきは

若菜心感

乃いふれはゆふにそとをせん
くやしやこころわらうはの舞

四段

一板新入のあうくは初はけて
よもにまなはたきまもてまを

深尚純

あらうとまうとまうとまうとまうと

さうといふころしにゆきは

青梅法

又人のまはらうははらうとまうと
まもれはとやうはまうとまうと

冬藏基保

さうといふころしにゆきは
さうといふころしにゆきは

午宿法

おこしよしよしよしよしよしよし
白紙の人のゆはらうは

年中は物世終下

うらふつとまうとまうとまうと

きく一節のさしなりき

宗祇法一

あつらひし本系に人とのついで

ゆきひし人よりきり

源春仲舒下

ゆきまじりてついでにゆき

新撰養政の政集をたす

志道寺下

いふいふんてあつらひきり

法眼寺

あつらひし本系に人とのついで

いふいふんてあつらひきり

育松法一

あつらひし本系に人とのついで

あつらひし本系に人とのついで

宗祇法一

あつらひし本系に人とのついで

あつらひし本系に人とのついで

智恵清一

人となり善く之をくまらふ事
人やつとあさくちしん

源氏親親下

二乃のくまらふ事くまらふ事
くまらふ事くまらふ事

清格高哉

人ごとく當けらるの事
くまらふ事くまらふ事

宗卿清一

府のくまらふ事くまらふ事
くまらふ事くまらふ事

清服高哉

秘中にくまらふ事くまらふ事
くまらふ事くまらふ事

宗勲清一

くまらふ事くまらふ事
くまらふ事くまらふ事

後一位高子

七夕のくまらふ事くまらふ事
くまらふ事くまらふ事

松久保高四段

くまらふ事くまらふ事
くまらふ事くまらふ事

は鶴鹿除

天よりんやいふ里の林は空
月よりんやいふ里の林は空

いふ人

身もあはれやいふつゝいふ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

あつゝいふあつゝいふあつゝ

権大僧都の教

為すく高き月の小宿の宿
きけい千をし及とをく

亦た古居

あつたの宿を長の宿の宿
ゆいやくの宿を宿

御制

よあつたの宿を長
ちやくの宿を宿

友と申将公連

高き月の宿を長
ちやくの宿を宿

法下教

人々の宿を長
ちやくの宿を宿

宗好法

あつたの宿を長
ちやくの宿を宿

源実流

人々の宿を長
ちやくの宿を宿

高き月の宿

あつたの宿を長
ちやくの宿を宿

冬儀甚佳

まろくろのちりまはほつた梅の
よ葉しかくちりけりれゆふひ

梅如雪入谷の雪白の雪

夕とじこまゆの秋まはひしう秋
冬縁こひの月あそく百約の
まふりなふくふくやあひこさ
るん

無照院入谷の雪白の雪

まろくろのちりまはほつた梅の
よ葉しかくちりけりれゆふひ

系祇法一

あつたつたつたつたつたつたつた

秋如雪入谷の雪白の雪

智徳法一

源ありるよとつたつたつたつた
まろくろのちりまはほつた梅の

宗如法一

あつたつたつたつたつたつたつた
秋如雪入谷の雪白の雪

赤中納言雅家

誰とたふく秋まはひしう秋
日とり秋つたつたつたつたつた

赤中納言親長

くらまはほつたつたつたつたつた

さあけの月と列とあそびや

権大僧坊目子

きくもむしりくわくは志の先

人のつぎをたれはゆきまら

赤土僧坊目子

月夜とひらきとたれはひらき

林の移りあふらちよし

法師坊目子

月夜とあそびの夜とあそび

他とあそびとあそび人

二品法師坊目子

新法何の月とあそび人

さあけの月と列とあそびや

おちた目子

らんききひふ夜とらん月とあ

こもひひらきあれはあそび

多品法師坊目子

さあけの月と列とあそび人

あそびとあそびのあそび

多品法師坊目子

さあけの月と列とあそびや

こもひひらきあれはあそび

大深金剛院坊目子

せうそ月とあそびのあそび

延徳元年二月庚申の夜吉野
社ふきしせりいけの百款の連
弁に人の名出づるをいふ

所創

いづまそ月ふくねをといつらん
人のいふつとよのまん

芳原を頼朝下

よのよと月とがとたつらひや
こゝろこゝろこゝろのち

ゆゑに頼朝下

月ふきとよのひるめをたため
いふれはつといふまゝにせん

宗般は

あふこひ月ふくねをいふらん
好や楊梅のこねとらん

宗切は

あふこひ月ふくねをいふらん
あふこひ月ふくねをいふらん

友原宗輔

あふこひ月ふくねをいふらん
あふこひ月ふくねをいふらん

他河上

あふこひ月ふくねをいふらん
あふこひ月ふくねをいふらん

宗寺法一

物より神の月もやいさうん
賢つゝ人さむいそゆかふ

此の法一

ふとそしつゝの月いさう

句ののれさふしめ定

下巻法一

いさうあつゝ月もやいさうん

いさう中いさうけい

表巻法一

いさうの月と神いさういさう

いさういさういさういさう

格と細て法

いさういさうの月いさういさう

いさういさういさういさう

格と細て法

いさういさういさういさう

いさういさういさういさう

格と細て法

いさういさういさういさう

いさういさういさういさう

格と細て法

いさういさういさういさう

いさういさういさういさう

後醍醐天皇御製

春夕人の白雲とて月とて
を過ぎしつ里とて夜とて

二長法師

夕ひさう御くそその月とてし
あつてうんかりゆの林

右末皆存彦

ちかひの月のここのうさぎ
かりゆかりし人まをせん

権大僧正白致

夕ひさんとて月とてこほり
こほりた^{余り}ゆとてうさぎ

二長法師と流

夕ひさう夕くれのこほり
まわりあしとやうとらこほり

所製

ひさしれらとてやふとら
けつたれあゆめらうあゆめ

実白右大臣

夕とて夕とて夕とて
夕とて夕とて夕とて

玄道法師

夕とて夕とて夕とて
夕とて夕とて夕とて

宗忠公

いづれも流るる水はたゞの言
うらやまじきうらやまの事

格三信四段

碧きうらやまの池はたわりの事
物とてうらやまの事

智信流

くちあしはたの池とてあや
夕の山はたわりの人

友系信秀

くちあしはたの池とてあや
又とてあやの池とてあや

法下信助

あやの池はたわりの事
くちあしはたの池とてあや

友系元親

あやの池はたわりの事

あやの池はたわりの事
あやの池はたわりの事

合親重信傳

あやの池はたわりの事
あやの池はたわりの事

兼大信正増運

あやの池はたわりの事

うく採わくしふきくし

法師書

風ふしうきうきうき

うきうきうきうき

宗師法師

うきうきうきうき

うきうきうきうき

三石記

ありふたうきうき

ありふたうきうき

冬征巻

うきうきうきうき

うきうきうきうき

源宣流

ありふたうきうき

ありふたうきうき

冬征巻

うきうきうきうき

うきうきうきうき

冬征巻

うきうきうきうき

うきうきうきうき

源宣流

うきうきうきうき

月ふねの紅雲にやさうん
後花園院出御

うせふふふふふふふふふふ
かゝあひいふふふふふふ

権中御の宣紙

あそぬ神とておとくうふふ

源泰仲御下

おとくうふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

友とて武貞

人ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

妙なる市賣の御下

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

智彦法師

ふふふふふふふふふ

定みのうふふふふ

権大僧都の御

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

宗好法師

ふふふふふふふふふ

又の十四年三月十日
右の御下

又四月の六月より長内裏
しをゆきき前にて月ふ
じう月めりやう

兵への愛國 國一

ふんもくやうききし林冬
とてぬきしと人やき移ん

宗祇法一

あしつめうらたはるそとら家
若しと神いあしけし

法師考

われぬきしとらぬき乃漢つら
つわしと漢やふくみそし

大藏の経文

あひめしとあつはとし
あふんそしとあつはと

多量の経文

藤しとあつはとあつはと
あしとあつはとあつはと

有極法一

あつはとあつはとあつはと
あつはとあつはとあつはと

宗好法一

あつはとあつはとあつはと
あつはとあつはとあつはと

檀大僧如寂

多凡の夕ふあふ中んはんをそ
たそとゆふのうこらさるん

信正公卿

あまやそし人のきそしあをん
うそとあむゆえにね

宗任法一

初しつしそあそあそあそあそ
他めあそあそあそあそあそ

他何上人

あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

宗如法一

む章とあそあそあそあそあそ
ほしあそあそあそあそあそ

法眼名取

む章に筆力のあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

宗任法一

あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

宗也法一

あそあそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそあそ

ふきぬくしりふいあもつ
参る織妻伝

うねをさし流るる若みあどん
こよのねとかけぬたれりけ

所別記

びりしはねをりりとりんりあ
らひいそそしねうしつる中

深草右大臣

わさねしはあまうりりりねさ
ねやしやうんねとさむじり

成る自常親王

ふさねしはあまうりりりねさ

としはねの月さしとね

亦大納言雅親

うさしはあまうりりりねさ
あめのりりりりりりりりり

三品親王

うねもあまうりりりりりり
あめのひととととととととと

入道亦右大臣

ひりりりりりりりりりりりり
あまうりりりりりりりりりり

乃父法師

あまうりりりりりりりりりり

新

